授業探訪　京都大学

歴史から大学・大学生について考える
―京都大学の歴史の講義から―

西山　伸

はじめに

筆者は、2002年度から京都大学において自らの大学の歴史に関する講義を行っている。しかし、このたび立教大学主催のシンポジウム「自校教育の到達点と今後の課題」で報告する機会をいただいたものの、自分の行っている授業が果たして言われるところの「自校（史）教育」にあてはまるのかどうか、いささか疑問を感じている。以下、筆者の授業実践について簡単に紹介し、授業の意図、自らの大学の歴史を教えることの意味について筆者の考えるところを述べることとする。

1. 授業の概要

本講義の科目名は「現代の大学・大学生論」であり、もともとは京都大学高等教育研究開発センターの溝上慎一准教授の発案で始まったものである。授業の種別は教養教育を担う「全学共通科目」であるので、全学部の学生が受講することが可能となっている。実際、2008年度には135名が受講したが、その内訳は、総合人間学部12、文学部16、教育学部8、法学部16、経済学部16、理学部16、医学部1、薬学部7、工学部31、農学部12、と受講生は全学部に亘っていた。開講は前期のみで、合計13回の授業を筆者が前半の7回、溝上准教授が後半の6回を担当し、前半では後述のように京大創立から1960年代末まで、後半ではそれ以後から現在までの大学・大学生についての講義を行っている（なお、2009年度からはこの形式ではなく筆者単独で歴史的側面に特化した講義を行う予定である）。評価については、毎回の講義終了後に受講生から提出されるコメントと学期末に行う試験（溝上准教授より1問、筆者より1問出題）とを総合して行っている。ちなみに2008年度に筆者が出した試験問題は、以下のとおりであった。

問　1968～69年の「大学紛争」について、以下の二つの問いに答えよ。

(1)「大学紛争」が全国的に拡大した原因について、①大学内部の要因、②大学外部の要因、を一つずつ挙げて論ぜよ。

(2)「大学紛争」について考察することの今日的意味について考えることを論ぜよ。

2. 授業の内容

筆者が担当している7回分のテーマは次のとおりである。

(1) 帝国大学の始動と京都帝国大学の創立
(2) 国家と大学 ―滝川事件―
(3) 戦争と大学
(4) 出兵する大学生 ―学徒出陣―
(5) 新制大学発足と京都大学
(6) 大学紛争とその背景（1）
(7) 大学紛争とその背景（2）

毎回の授業では、その日の話の流れを記したA4判用紙1枚と、資料を20点から多いときには40点程度切り貼りしたA3判用紙を数枚配布し、これら

に基づいて筆者が話をする。なお、(6)では他と異なり、1995年にNHKが放送した東大全共闘を取り上げた番組（1時間程度）を見せている。開講当初は黒板を使用したり、受講生に当てて答えさせたりもしていたが、話すべき内容や資料の数が増えるとともに、そうしたことは行わなくなった。

例えば（4)「出兵する大学生 －学徒出陣－」では、一次史料26点、表7点、図2点、写真2点、参考資料2点をコピー・切り貼りして配布した。まず「はじめに」で「学徒出陣」が名称は有名なものの実態がよく知られていないこと、およびこの言葉の由来について説明し、次いで「1　制度」において法令等からその制度的側面を押さえておくようにする。その際には、軍隊に入った者の学籍上の取扱や、朝鮮・台湾出身の学生たちがどのように扱われたかにも触れるようにしている。そして「2　実態」では、京大における出陣学徒数、戦没者数等の数値を筆者の所属する京都大学大学文書館が行った調査結果をもとに示し、同時に他大学や他国との比較も行っている。さらに、「3　学徒兵たちの記録から」では、同じく京都大学大学文書館が行った「学徒出陣」体験者への聞き取り調査の記録や、学徒兵の遺稿集、回想録（京大出身者以外のものも含む）を使い、在学中の戦争への認識、自らの運命の受け入れ方、軍隊における自らの役割についての理解、等について探っていく。最後の「おわりに」では、なぜ今「学徒出陣」を取り上げるのか、われわれが考えるべきことは何なのかを、情念ではなく理性の問題として提起して終えるようにしている。

受講生から提出されるコメントを見る限りでは、彼らの反応は良好である。「学徒出陣については、日本史の授業で少し習った程度であまり詳しく知らなかったが、その実態についてよく分かった。自分と同世代の学生達ということもあって私は大変感情移入してしまいがちだが、ただ学生たちを“被害者”として見るだけではなく、客観的に分析しなければならないということを初めて感じた」「『学徒出陣』という言葉は聞いたことがあったけれど、その実態については何も知らなかったことが思い知らされた。感情移入して涙を流せば終わり、にしてしまっていい事柄でないことはよく分かる。〔中略〕戦争をそんなイメージだけのものにしてしまわないようにすることが、今の私たちの世代の役割かもしれない」「今日様々な史料を提供され、戦争について自分で考えられるキャパシティをそろそろ身につけ、いつまでも逃げていてはいけないと感じました」「日記や手紙もしくは本人へのインタビューができ、史料が十分にあるように思えてもまだまだ分からない部分が多いというのが歴史の難しさを感じさせた」というように、従来受講生たちが抱いていた「学徒出陣」のイメージが一旦崩され、そこから自分の頭で戦争全体を捉え直そうという姿勢が見て取れる。同時に単純には理解できない歴史の難しさも感じたようである。

3. 授業の意図

この授業の第一の特徴は、資料を多数使用していることである。ある歴史的事件を扱う際にもできるだけ多様な側面からの資料を提示し、結論を簡単に導き出すようなことは避けている。これは、この授業が歴史を素材にした教養教育であるという筆者の理解から、資料をもとに自分の頭で物事を考えるという、歴史学からのものの見方、考え方を体得してほしいと考えているからである。授業の第二の特徴は、扱う

テーマを大幅に絞り込んでいることである。授業の回数が限定されていることも、その理由の一つではあるが、それ以上に上述したこの授業についての筆者の理解から考えてこれだけのテーマでとりあえずは十分であると考えていることによる。取り扱っている京大の創立期、滝川事件を含む戦時期、新制度が発足した敗戦直後、そして大学紛争と、何れの時代も世の中が大きく変動し、大学と社会の関わりが問われた時期と言える。こういった時期に焦点を当てることによって、受講生は大学や大学生について考える手がかりをつかみやすくなるのではないかと考えた。

すなわち、筆者の授業は自らの大学の歴史的変遷を通史的にたどるものではなく、まして愛校心を涵養することが目的なのではない。その意味では、冒頭に述べたように近年言われているところの「自校（史）教育」とは少々異なるように思われる。繰り返しになるが、歴史的なものの見方、考え方を身につけるのがこの授業の目的であり、京都大学の歴史はそのための素材であるというのが筆者の位置づけとまとめることができる。

おわりに

近年多くの大学で「自校（史）教育」が行われているという。しかし、それが単に愛校心を育てることを目的としているとしたら、筆者は疑問を覚えざるを得ない。物事を客観的、批判的に見る力がそのような授業によって育つとは思えないからである。狭い意味での自校に限定されずに、それぞれの時代の中で受講生と同じ年代の大学生が何を考え、何に悩み、どう行動したのか、そして彼らの居場所であった大学とはいかなるものだったのか、を提示することで教養教育の目的には十分かなうのではなかろうかと筆者は考える次第である。

にしやま　しん
（京都大学大学文書館准教授）